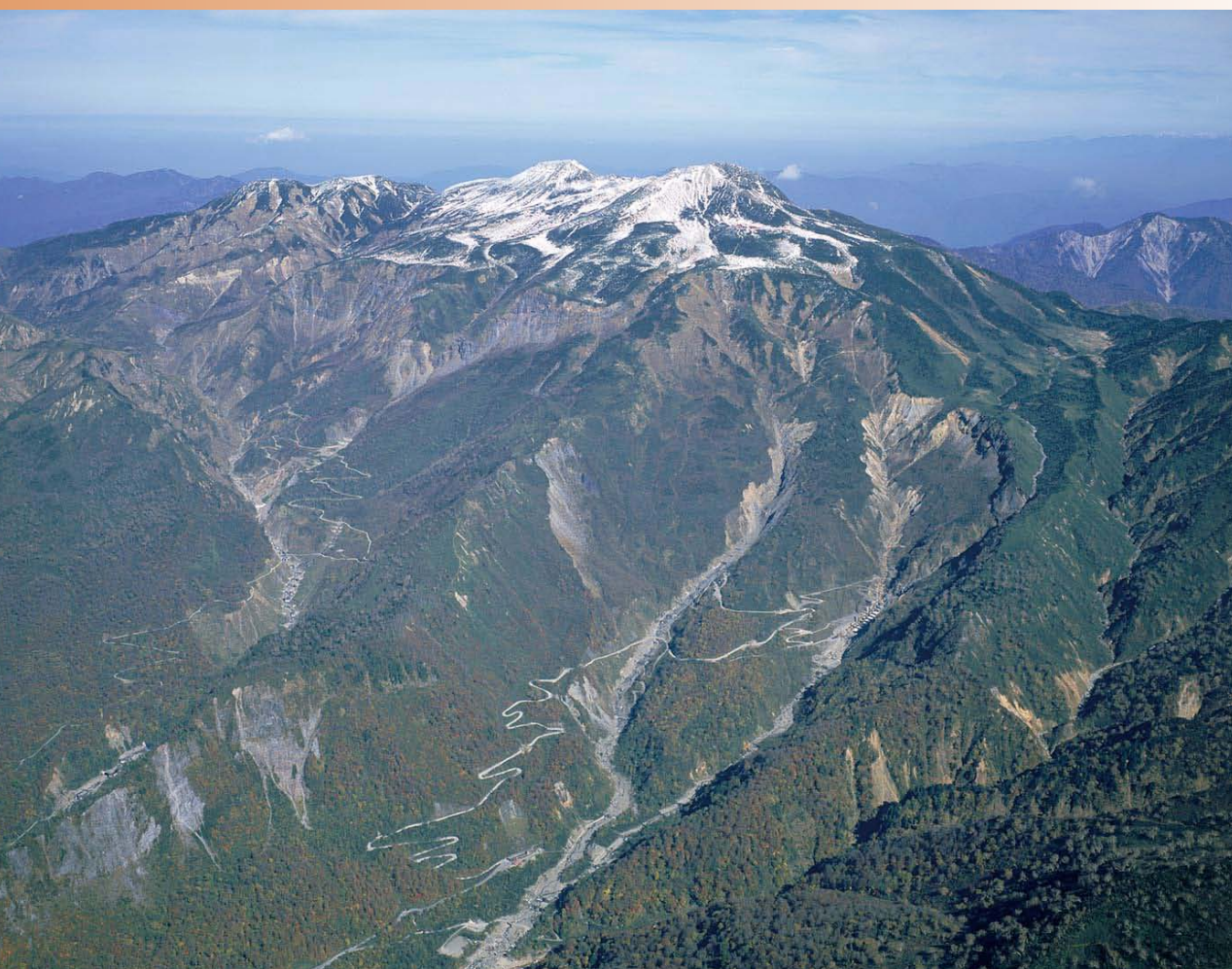


はくさん

第40巻 第3号

目次

- P 1**
甚ノ助・別当谷の地すべり
- P 2**
白山のゴミムシ
平松 新一
- P 8**
白山国立公園指定
50周年記念フォトコ
ンテスト入賞作品(1)
- P12**
白山国立公園指定
50周年記念式典
- P14**
山の学び舎だより
- P16**
フォトギャラリーー
たより



甚ノ助・別当谷の地すべり

この写真は白山の山体をほぼ南西の上空から撮影したものです。山頂（写真中央、上部）の右の峰が最高峰の御前峰（2,702m）、左の峰が大汝峰（2,684m）で、白山の山体は地すべりなどによって周辺から浸食されています。地すべりは、斜面の広い範囲がかたまりとなって比較的ゆっくりと滑り落ちる現象です。写真ほぼ中央部の右上から左下に広がる凹地は主に地すべりによって形成されたもので、柳谷川支流の甚ノ助谷（右の河川）と別当谷（左の河川）が流れています。この凹地には、地すべりによって滑り落ちたかたまり（地すべりブロック）があります。甚ノ助谷と別当谷に挟まれた部分が地すべりブロックを代表するもので、この上には登山者の利用が最も多い砂防新道が通っています。凹地にある地すべりブロックは現在でもわずかずつ動いており、国土交通省のGPS測量によると、移動速度は融雪期に速くなり、早いものでは年間十数 cm に達するものもあります。

（東野外志男、写真提供：国土交通省金沢河川国道事務所）

白山のゴミムシ

平松 新一（白山市立白嶺小学校）

みなさんは、白山にすんでいる生き物の名前を聞かれたら何と答えますか？ツキノワグマ、ニホンザル、オコジョのような哺乳類でしょうか。それとも、イヌワシ、カヤクグリ、イワヒバリなどの鳥類でしょうか。

このように聞かれて、昆虫と答える人は多くはないでしょう。でも、夏の白山には多くの昆虫がいるのです。チョウでは高山チョウとして知られているベニヒカゲやクモマベニヒカゲ、色鮮やかなクジャクチョウ、旅をすることで最近よく知られるようになったアサギマダラなどが登山道や室堂周辺で見られます。また、ハチやアブ、ハエの仲間は、高山植物を訪れて受粉を助けています。



クジャクチョウ
室堂周辺やお花畑で見られます。

しかし、ゴミムシと言われると、ぴんとくる人がいないどころか、ゴミムシの名前も知らない、どんな虫か見たこともない人が多いのではないのでしょうか。ところが、白山には、百種類以上もゴミムシがいて、それぞれが特徴的な分布や生態をしているのです。私は、白山のゴミムシについて、15年くらい前から調べてきました。ここでは、私がこれまで白山で調査してきたゴミムシの分布や生態について、分かったことの一部をお話ししましょう。

ゴミムシってどんな虫？



オオルリオサムシ
北海道に分布する美しい種類です。体長約3cm。

ゴミムシは、昆虫類の分類群の中では、コウチュウ目という仲間に属しています。コウチュウ目は、かたい前ばねで体が覆われていることを特徴とし、カブトムシやクワガタムシ、ホタルやテントウムシなど、名前が知られたものが多いグループです。その中でもゴミムシは主にオサムシ科に属しています。オサムシ科の昆虫は、日本では地味な色の種類が多いのですが、ヨーロッパや中国、日本でも北海道などには緑色や紫色に輝く種類がいて、「歩く宝石」と呼ばれています。手塚治虫さんの名前が、この「オサムシ」という昆虫の名前からとったことを知っている人もいますよね。

ところが、ゴミムシって言う名前を聞くと、印象はよくありません。確かに、ゴミムシは湿った場所にもすんでいて、昆虫や小動物の死骸などを食べることもあります。しかし、決してごみ集積場が生活場所の中心でもなく、ごみを主食にしているわけではありません。人の多い住宅街よりも森林などの自然の豊かな場所に住んでいる種類の方がずっと多いのです。それに、多くのゴミムシは雑食性で、中には植物を中心に食べるグループもあります。ですから、ゴミムシってきいても、怪しい虫だとか、汚い虫だとか思わないでください。

ゴミムシは、その分布や生態について、比較的良好に研究されているグループです。地味な虫なのに、なぜ研究されるのでしょうか。それは、ゴミムシの生活スタイルと関係があるのです。

ゴミムシの多くは、地上を歩き回り、小さな昆虫や小動物などを捕らえて食べて生活しています。このような生活をしているゴミムシは、飛ぶ必要がありません。そのために、ゴミムシには翅が退化し、飛べなくなった種類が多くいます。飛べなくなると、移動範囲が限られてしまいます。大きな川や高

い山などに隔てられた場所では、飛べなくなったゴミムシは、そこを越えて移動することができません。そんな場所では、外部との交流ができなくなり、そこで世代交代を繰り返すしかありません。そうするうちに、その場所の環境に適応して、長い間のうちに、他の場所にいる同じ種とは少しずつ大きさや形、あるいは生態などが異なっていきます。そして、さらに長い年月によってその違いがどんどん広がり、やがては別の種となってしまうのです。ですから、ゴミムシには、似た種類でも地域によって別の種や亜種になっている場合が少なくありません。そのためにゴミムシでは、分布地域の研究や地域ごとの種の変異を調べる研究が多く行われています。



地表で活動するゴミムシ (丸印)

また、飛べなくなって、移動範囲が制限されることにより、特定の環境に対する適応も進みました。ある環境に適応したゴミムシは、他の環境ではあまり見られません。例えば、森に住んでいるゴミムシは草原や畑ではあまり見られませんが、草原や畑にいるゴミムシは、森の中では見つかりません。このようなゴミムシの生態的な特徴から、ゴミムシを環境指標として扱おうとする研究も世界的に行われています。

さらに、ゴミムシの調査が比較的簡単であることも、研究対象とされやすい点の一つです。ゴミムシの調査では、主にピットフォールトラップ法が用いられます。これは、紙あるいはプラスチック製のコップを、口を上にして地面と同じ高さに埋め、しばらく放っておき、その後そこに落ちたゴミムシを採集するという簡単なものです。採集の効率を高めるために、コップにさなぎ粉、すし酢、ビール、腐肉など、ゴミムシを誘引するための物質（ベイト）を入れることもあります。

このような特徴を持ったゴミムシですが、では白山では、どのような種がいてどんな生活をしているのでしょうか。



ピットフォールトラップ (矢印)



トラップに入ったゴミムシ

白山のゴミムシ

私がゴミムシに関わるようになったのは、当時まだ設立準備段階だった石川県ふれあい昆虫館で勤務していた時からです。昆虫館に設ける「白山の昆虫」の展示コーナーのために、白山で昆虫の調査や採集を行い、そのときにゴミムシについて調査を始めたのがきっかけでした。調査を行っているうちに、白山に分布するゴミムシ類は、種ごとに分布高度や分布環境、出現時期が違っていることが分かってきました。白山や他の高山で行われた調査は少なく、調べれば調べるほど新たなことが分かってきました。そして結局、昆虫館を離れた今も、毎年調査を続けています。

さて、白山にゴミムシは何種類いるのでしょうか。1998年に発行された「石川県の昆虫」には、石川県内で見つかった昆虫の種類が記録されているので、この資料を調べればおよその数が分かります。この資料で旧吉野谷、尾口、白峰村で記録されている種を白山で見つかった種とすると、約150種のゴミムシが白山とその周辺から見つかることになります。この資料では、石川県からは約320種のゴミムシが記録されているので、白山では石川県のゴミムシのおよそ半数が見られることになります。

ただ、石川県全体と白山とでは、その種類構成は異なっています。図1はゴミムシを科の下分類群である亜科ごとに分け、「石川県の昆虫」から石川県と白山で記録されている種類を数え、総種数に対する割合を示したものです。これによると、白山では石川県全体よりもマルクビゴミムシ亜科、オサムシ亜科およびナガゴミムシ亜科の割合が高く、反対にマルガタゴミムシ亜科、ゴモクムシ亜科およびアオゴミムシ亜科の割合が低いことが分かります。これまで調べた結果から、森林環境ではナガゴミムシ亜科の割合が高く、草地のような開けた環境ではゴモクムシ亜科の割合が高いことが分かってきているので、ゴミムシの種数割合からも白山やその周辺には森林環境が多いと言えます。では、次はもう少し詳しく白山のゴミムシの分布についてお話しします。

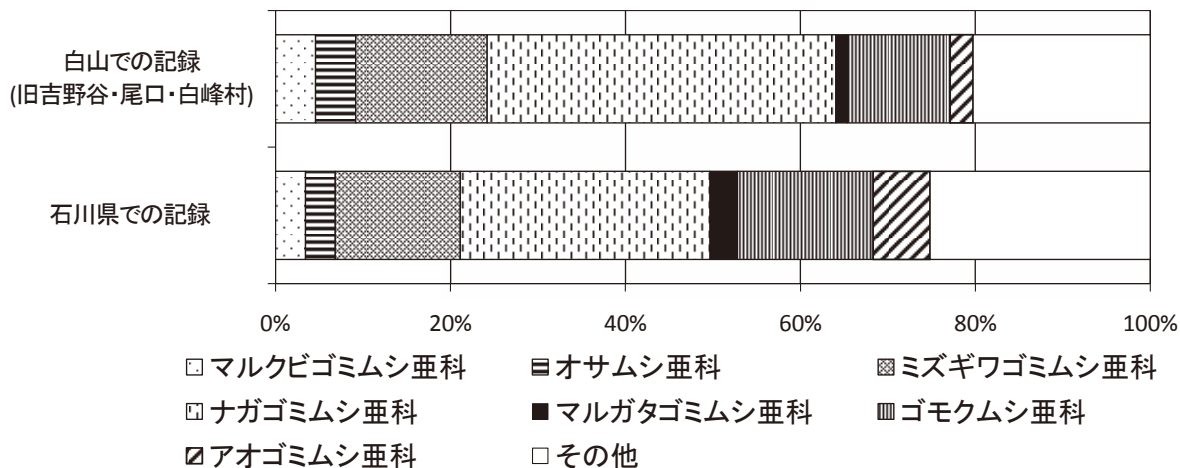


図1 石川県と白山におけるゴミムシ類種数の亜科別割合

白山のゴミムシの高度分布

白山では、標高によって分布している植物が異なっています。例えば、クロユリは別当出合の登山口付近から甚ノ助小屋あたりまではありませんが、室堂周辺には多いですよね。

ゴミムシも同じように、種類ごとに生息している高度が異なっています。図2には、これまでの調査結果をもとに、白山のブナ帯から高山帯までで見られるオサムシ類5種の分布高度を示しました。マイマイカブリやクロナガオサムシは低地から比較的高いところまで分布しています。マイマイカブリの名は、カタツムリを食べる昆虫としてきたことがあるかも知れませんが、この種が石川県では海岸周辺から室堂の少し上くらいまでの最も広い高度範囲で見つかっているのです。これに対して、ニシアルマンオサムシやコクロナガオサムシのように、高いところだけでしか見られない種もいます。ニシアルマンオサムシは、白山では標高1,000mから2,000mの範囲に限られて分布しているようです。コクロナガオサムシは、ニシアルマンオサムシよりも高い1,700mあたりから山頂付近まで分布しており、最も高いところに適応しているオサムシです。この種は11月、降雪があった弥陀ヶ原でもトラップに入っていたことがあり、寒さに強いことがうかがえます。

オサムシ類以外でも、ほとんどのゴミムシは限られた高度範囲に分布しています。標高2,000m以上でだけしか見つからない種も何種類もいます。このような種は、温暖化が進むと生息域の高いところに押しやられてしまい、個体数の減少や絶滅の危険性が高まっていくと考えられます。

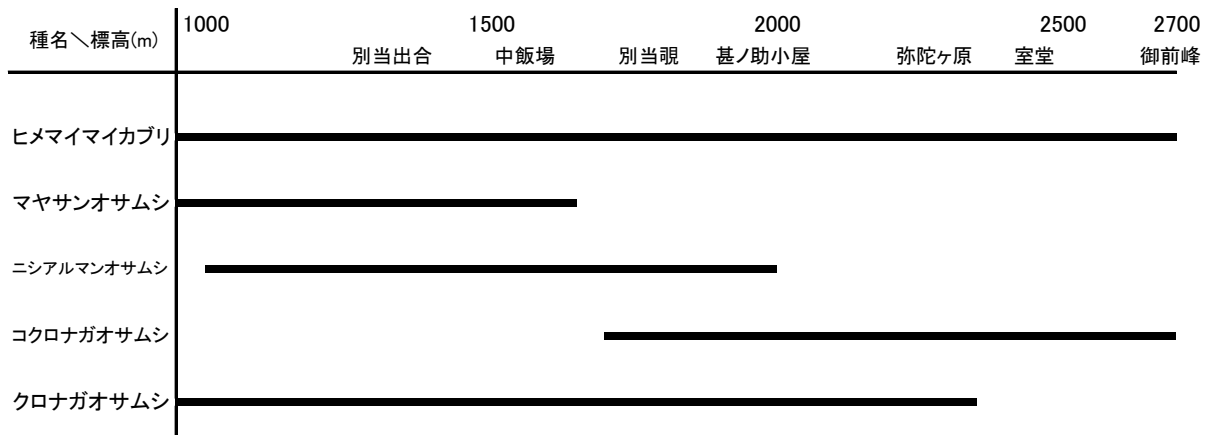


図2 オサムシ類の高度分布

白山のゴミムシの生息環境

白山の砂防新道ルートでは、甚ノ助小屋を過ぎてしばらくすると、高い木が少なくなり、周囲が開けた明るい環境になります。ここより標高の高いところには、湿原、雪渓、河原、ハイマツ林、風衝荒原（風が強く、植物がまばらな場所；室堂より上で見られる）など、山岳高地特有の様々な環境が成立しています。

このような高所でも、環境ごとに見られる種類が異なっています。表1に、主な環境に見られる種類を示しました。この表を見ると、コクロナガゴミムシはどの環境でも見られますが、それ以外の種は決まった環境に分布しているようです。また、湿原や雪渓で見られる種は、ハイマツ林では見られません。ハイマツ林と雪渓は隣り合っていることもあるのですが、それぞれに生息するゴミムシは異なっているのです。私は、その理由を地表環境の違いだと考えています。ハイマツ林の中は、雨や風に直接さらされることもなく、日光が直接林内に射し込むこともありません。このため、ハイマツ林の林床は高山帯の中でも比較的安定した環境にあると言えるでしょう。一方、雪田や湿原の地表は風雨の影響を直接受ける上に、直射日光によって日中の温度変化も激しく、厳しい環境にあります。このような環境条件の違いがあるので、ハイマツ林と雪渓が隣り合っているにもかかわらず、そこで見られるゴミムシの種類も異なるのでしょう。

表1 標高 2,000m 以上の環境で見られるゴミムシ

種名\環境	湿原	雪田	河原	ハイマツ林	風衝荒原
コクロナガオサムシ	○	○	○	○	○
チビマルクビゴミムシ					◎
クロマルクビゴミムシ			◎		
シロウマミズギワゴミムシ		◎	○		○
ミズギワゴミムシ属の1種	◎	◎	○		◎
ホシナガゴミムシ	◎	◎			
ヤノナガゴミムシ				◎	○
ツヤモリヒラタゴミムシ					◎
タケウチツヤヒラタゴミムシ				◎	



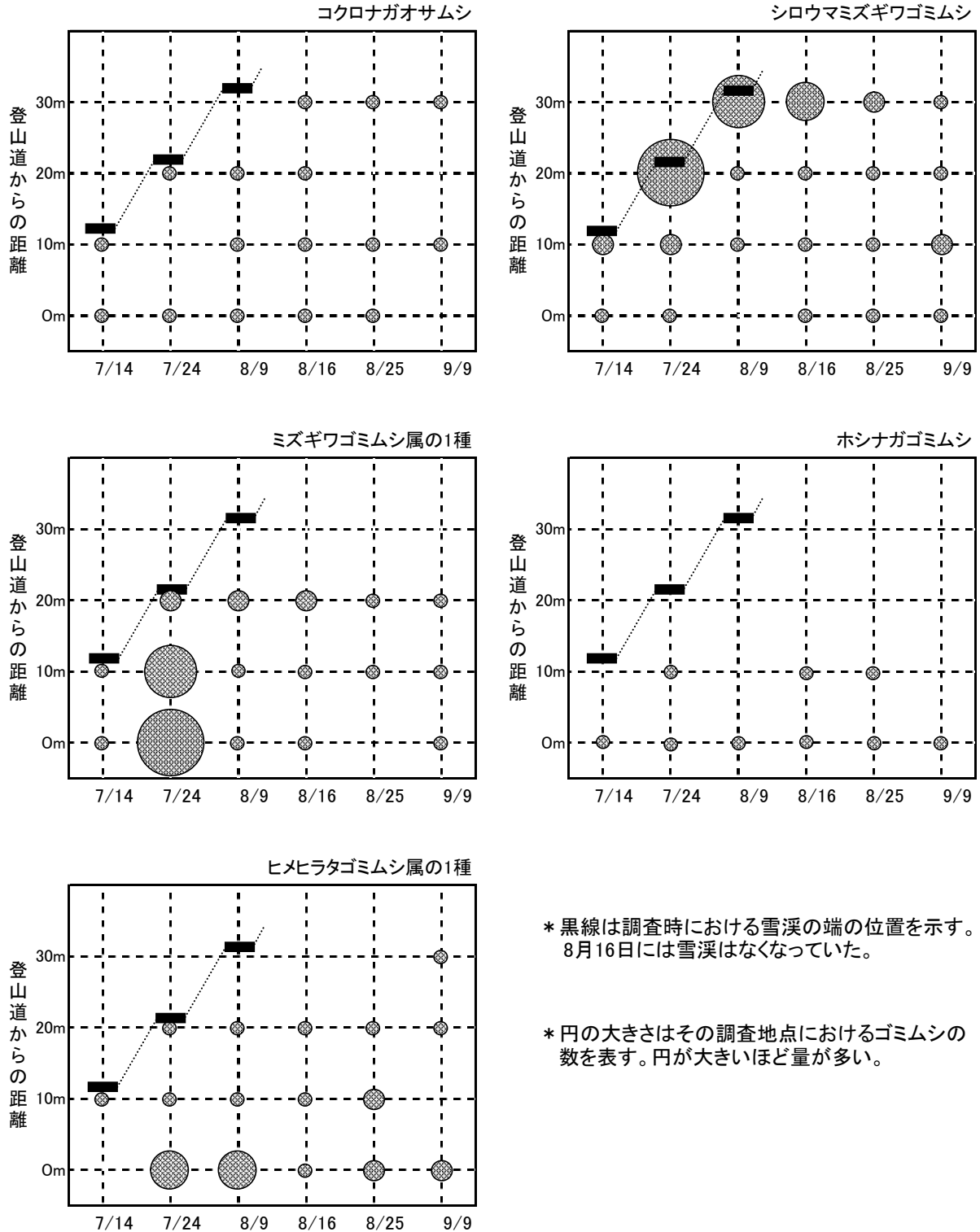
コクロナガオサムシ

体長 2cm で、高山帯では最大のゴミムシです。

◎: その環境で多く見られる種類、○: その環境で見られる種類

雪溪周辺にいるゴミムシの出現状況

雪溪は、環境条件の厳しい場所だとお話ししました。それだけでなく、雪溪は時期や場所によっても大きくその様相を変えます。その地表は、夏の初めはまだ雪に埋もれたところが多いのですが、7月にはどんどん雪解けが進み、雪解けが進んだ場所ではクロユリ、ハクサンコザクラ、アオノツガザクラなどの高山植物が一齐に開花します。8月になると、早い時期に雪解けし水分が少なくなった乾



* 黒線は調査時における雪溪の端の位置を示す。
8月16日には雪溪はなくなっていた。

* 円の大きさはその調査地点におけるゴミムシの数を表す。円が大きいほど量が多い。

図3 水屋尻雪溪におけるゴミムシの出現状況

燥気味の場所や雪解けが進み高山植物が
開花している湿潤な場所、雪渓端で地面
から水が浸み出すくらい湿潤で、植物が
ほとんど生育していない場所など、狭い
範囲で多様な環境が存在しています。

場所や時期によって大きく環境が異なる
雪渓では、ちょっとした環境の違いによ
って、ゴミムシの出現状況も異なってい
るに違いありません。そこで私は、水
屋尻雪渓で雪渓の後退に伴ってゴミムシ
の出現状況がどのように変わっていくか
を調査しました。そのうちの2001年の
調査結果を図3に示します。

水屋尻雪渓は、室堂から北側のお池め
ぐりをする登山道沿いにあり、初夏の頃
には登山道を覆うほど雪が残っています。

季節が進むにつれ雪渓は山頂側に後退し、小さくなっていきます。2001年は7月中旬から9月上旬にかけて6回の調査を行いました。雪渓は、第1回調査時(7月14日)には登山道から10m後退した場所にあり、その後第2回(7月24日)、第3回(8月9日)の調査には雪渓はさらに10mずつ後退し、第4回調査時にはなくなっていました。



ミズギワゴミムシ属の一種
体長4mmの小さなゴミムシです。

この調査では、コクロナガオサムシはどの調査時にも広い範囲に出現していました。これに対して、ミズギワゴミムシ属の2種は特徴的な出現状況をしていました。シロウマミズギワゴミムシは雪渓近くに出現する傾向があるのに対して、ミズギワゴミムシ属の1種は雪渓の端というよりも、雪渓から少し離れた場所で、しかも早い時期に多く出現しているようでした。また、ホシナガゴミムシ、ヒメヒラタゴミムシ属の1種は、雪渓からやや離れた場所で出現していました。

このように同じ雪渓の中でも、雪解けの時期や場所によってゴミムシの出現状況は変わっていました。環境条件の厳しい場所であるからこそ、ゴミムシたちは自分たちが生きていくためによりよい環境や時期を選んで生育しているのかもしれない。

終わりに

このように、白山にはたくさんのゴミムシがいて、それぞれの種が自分に都合の良い高度や環境、時期を選んで生活していることが分かりました。私自身、白山のゴミムシについて全く知識のないところから調査を始めましたが、それからいつの間にか15年も経ってしまいました。

それでも、これまで白山で見つかっていなかったゴミムシがまだ今になっても採集されることはありますし、ゴミムシの分布や生態について、知りたいことはまだまだたくさんあります。一つのことになると、また次の疑問がわいてきて「この先はどうなるんだろう」と興味は尽きません。ですから、みなさんもゴミムシとは言いませんが、何か一つのことを疑問に思って、それを不思議に思ったり、疑問に感じたりしたことを突き詰めてみませんか。それを考え続けることで、新たな疑問がわき、さらにその先を知りたいと思うようになるのではないのでしょうか。きっと、それが科学研究の入り口になるはずですよ。



水屋尻雪渓

例年、8月中旬頃まで雪が残っています。

白山国立公園指定 50 周年記念 フォトコンテスト入賞作品 (1)

白山国立公園指定 50 周年記念フォトコンテストの入賞作品が決まりました。フォトコンテストの応募期間は 6 月 8 日～ 10 月 10 日で、応募総数は 259 点、応募者数は 59 名でした。上馬康生、曾我隆行、吉澤康暢、神田修二の審査員により 10 月 18 日に審査が行われ、環境大臣賞 1 点、実行委員会会長賞 1 点、白山菊酒賞 1 点、環白山保護利用管理協会賞 3 点、自然人賞 4 点、佳作 10 点が選定されました。11 月 10 日の白山国立公園指定 50 周年記念式典の際に、フォトコンテストの表彰が行われ、入賞作品が展示されました。今号で環境大臣賞・実行委員会会長賞・白山菊酒賞・環白山保護利用管理協会賞・自然人賞を、次号で佳作の作品を紹介いたします。



環境大臣賞 「満月と月暈」^{つきがさ} 國定雄一



実行委員会会長賞 「夕暮の奇跡」 小西裕一



白山菊酒賞 「ご来光と祈り」 西本正一



環白山保護利用管理協会賞
「爽明翠ヶ池」
西野英一



環白山保護利用管理協会賞
「大地三唱」
今村源吾



環白山保護利用管理協会賞
「夕映え」
長野一郎



自然人賞「秋の姥が滝」
長谷川 悟



自然人賞「大汝のオコシヨ③」
山根 勝



自然人賞 たかね まつむしぞう「高嶺松虫草と大ハナアブ」
十良 美千代



自然人賞「めざせ！南竜山荘」
林 裕子

白山国立公園指定 50 周年記念式典



式典で式辞を述べる生方幸夫環境副大臣（写真提供：環境省中部地方環境事務所）

白山国立公園指定 50 周年記念式典が、平成 24 年 11 月 10 日（土）午前 11 時から白山市鶴来総合文化会館クレインにおいて開催されました。生方幸夫環境副大臣の式辞、実行委員会会長の谷本正憲石川県知事の開会挨拶の後、奥田建、田中美絵子、一川保夫及び広野允土国会議員並びに山田憲昭県議会議長の祝辞があり、作野広昭白山市長が歓迎の言葉を述べられました。その後、22 名の自然公園関係功労者環境大臣表彰、10 名の白山国立公園関係功労者特別表彰が行われました。午後は、「登山の魅力、白山の恵み」と題して、エッセイストの華恵氏の記念講演があり、シンポジウムでは、「白山の水、いきもの、信仰、文化」のテーマで、コーディネータの水野昭憲氏と 6 名のパネラーの議論、最後に「白山国立公園指定 50 周年宣言」が採択されました。記念式典には約 600 人の参加者がありました。併行して、会場内では、50 年のあゆみ、地元観光紹介のパネル展やフォトコンテスト写真展などが催されたほか、野外のふれあい広場では、環白山特産品販売や環境保全企業・団体 PR ブース等が設けられ、多くの方々が訪れました。



自然公園関係功労者 22 名を代表して、宮崎県の有村辰夫氏に生方環境副大臣から表彰状が授与されました。



白山国立公園関係功労者 10 名を代表して、石川県白山市の永井隆一氏に実行委員会会長の谷本正憲石川県知事から表彰状が授与されました。

「白峰かんこ踊り」

式典のオープニングとして白山市白峰に古くから伝わる郷土芸能「白峰かんこ踊り」が披露されました。



記念講演「登山の魅力、白山の恵み」

エッセイストの華恵氏（写真右）が、宮下由美子氏（ネイチャープロジェクト白山）と対談をしながら、登山の魅力や白山への思いなどについて語りました。

シンポジウム「白山の水、いきもの、信仰、文化」

水野昭憲（石川県立自然史資料館館長）がコーディネートし、小堀幸穂（白山菊酒呼称統制機構理事長）、村山和臣（白山比咩神社宮司）、宝珍伸一郎（勝山市教育委員会世界遺産推進室長）、深田森太郎（環白山保護利用管理協会会長）、石徹白小枝子、瀬川涼（環境省白山自然保護官）の6名のパネラーにより、白山のいきものや白山信仰など、白山の各テーマについて活発に議論されました。



白山国立公園の50年のあゆみや、地元の観光紹介、屋外では、環白山特産品の販売や環境保全企業・団体、環白山保護団体の活動などがパネル展示されました。体の宣伝等が行われました。

はくさん 山のまなび舎だより

中宮展示館のキャラクター・イヌワシ君



白山まるごと体験教室

トチノキ観察とトチモチ作り

きねをふるってトチモチ作り

9月30日(日)、市ノ瀬ビジターセンターで行いました(29名の参加)。参加者は、まず市ノ瀬から近いチブリ尾根の登山道を歩き、トチノキと地面に落ちたトチの実を観察、その後、トチの実の皮むきや灰汁(あく)抜きなど手間のかかる作業の一部を体験、最後にうすときねを使ってもちつきに挑戦しました。つきあがったトチモチはあんこや黄粉を付けて試食しました。なお、実施に当たりネイチャープロジェクト白山と白山自然ガイドボランティアの皆さんの協力をいただきました。



カいっぱいトチモチをつくちびっ子

アケビのつるでカゴ作り

個性あふれる作品できた

10月14日(日)、中宮展示館で行いました(36名の参加)。参加者は、午前中、アケビや他のつる植物についての説明を聞いた後、観察路へ出かけて実際にアケビなどを観察。午後から職員の指導のもと、各自カゴ作りに取りかかりました。同じ材料と手順をふんでいましたが、一人一人個性あふれるカゴが出来上がりました。そのカゴに観察路で拾ってきたドングリや落ち葉などを飾り、みなさん大満足されていました。



それぞれの作ったカゴを持って記念写真

イヌワシを見つけよう

悠々とした飛翔に感激

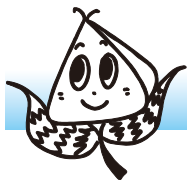
11月25日(日)、開館間もないブナオ山観察舎で行いました(家族連れ31名の参加)。快晴に恵まれ、ブナオ山の稜線沿いに3度(うち1度はつがい)、イヌワシの飛翔が観察されました。参加者のほとんどは、イヌワシを見るのは初めてとあって、青空を背景に悠々と飛ぶ姿に感激していました。また、観察の合間に、専門家によるイヌワシや白山の野生動物に関する解説のほか、イヌワシに関するクイズも行いました。



双眼鏡でイヌワシを探す参加者



ブナオ山上空を飛ぶイヌワシ



しぜん もりだくさん

市ノ瀬ビジターセンターのキャラクター・チブリ

白山麓里山・奥山ワーキング

白山麓柿もぎ隊

10月28日(日)、農林総合研究センター林業試験場の樹木公園で、柿もぎ作業を行いました(45名の参加)。放置されている柿の実をもぎ、サルやクマの人里への侵入防止や人と野生動物の関わりについて理解して頂くために行っているものです。参加者は7班に分かれて作業を行い、柿もぎ作業の後は、「白山麓の野生生物」について講義を受け、野生生物が増えている原因について考えて頂きました。なお、当初、白山市の神子清水町内で行う予定でしたが、町内のカキが不作だったため、実施場所が変更になりました。



竹さおを使って柿をもぐ参加者

白山自然ガイドボランティア

第3回研修講座

12月1日(土)、金沢市尾山町の石川県文教会館で実施しました(白山自然ガイドボランティア28名の参加)。まず、「私とツキノワグマ」と題した講演で、これまでおこなってきたツキノワグマの調査などの経験、近頃問題となっているニホンジカやイノシシの被害等について紹介しました。引き続き、白山まるごと体験教室、市ノ瀬ビジターセンター、中宮展示館の今年度の活動報告を行い、最後に平成25年度以降のガイド活動について意見交換しました。



熱心に講演を聞くボランティアのみなさん

センター主催行事 いしかわ自然学校「山のまなび舎」のお知らせ

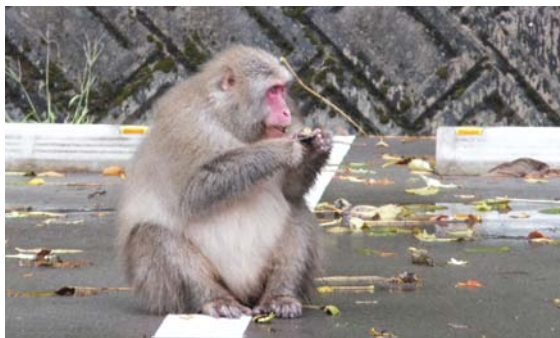
かんじきハイキング

日時：平成25年2月17日(日)10:00～15:00
場所：ブナオ山観察舎
定員：30名
参加費：100円
内容：雪の山を「かんじき」で歩きながらカモシカやニホンザルを見つけよう！
申し込み・問合せ：
1月17日(木)から申し込みを受け付けます。定員に達し次第締め切ります。詳しくは石川県白山自然保護センター(076-255-5321)まで。

ミニ観察会

日時：開館期間中(11月20日～5月5日)の土・日・祝日
10:00～15:00の間で1-2時間程度
場所：ブナオ山観察舎
内容：職員が周辺の自然をご案内します。かんじきを履いて雪山を歩き、自然を観察します。参加無料。参加申し込みは当日、職員へ。団体(20名以上)の場合は、事前に石川県白山自然保護センター(076-255-5321)へ連絡を。

フォトギャラリー —自然のひとこま—



ニホンザルはエサの少ない冬に備えて一生懸命食事をしています。脂肪を蓄えてお腹がかなり出ています。2012.11.2



虫たちの姿がほとんど見られなくなる時期ですが、木に出来た穴のところでトビナナフシを見つけました。2012.11.3



市ノ瀬の白山展望台より望む初冠雪の白山。2012.10.24



市ノ瀬名物のウバユリ。莖をゆすると種がパーッ。2012.11.5

たより

白山国立公園指定 50 周年記念式典のシンポジウムで、白山国立公園指定 50 周年宣言が採択されました。前文は省略しますが、宣言には次の 3 点が盛り込まれました。『①白山が水と命の源であることを常に意識し、清らかな水、命のつながりを大切にしたいと努めます。② 4 県に広がる白山国立公園を核に、環白山地域の人々が協働して、白山の恵みに気づき感謝する地域づくりを進めます。③白山国立公園の保全と適切な利用を通じて、白山が誇る自然、景観、歴史、文化を多くの人々に伝え、未来へ継承します。』この内容は、白山国立公園に関わる人々へのメッセージとして、受け継いでいきたいと思っております。なお、白山国立公園指定 50 周年関係の記念行事は、11 月 10 日の記念式典をもちほぼ終了しましたが、これからも白山国立公園に対して理解を深めて頂きたいと思っております。

(東野)

センターの動き (9 月 29 日～12 月 28 日)

- | | |
|---|--|
| 9.30 白山まるごと体験教室「トチノキ観察とトチモチ作り」
(市ノ瀬ビジターセンター) | 11.10 白山国立公園指定 50 周年記念式典
(鶴来総合文化会館クレイン) |
| 10.11～12 カモシカ担当者会議
(若狭町) | 11.12 中宮展示館冬季閉館 |
| 10.14 白山まるごと体験教室
「アケビのつるでカゴ作り」 (中宮展示館) | 11.19～20 自然系調査研究機関連絡会議 (さいたま市) |
| 10.28 白山麓里山・奥山ワーキング
「白山麓柿もぎ隊」 (林業試験場) | 11.20 プナオ山観察舎開館 |
| 11.6 市ノ瀬ビジターセンター冬季閉館 | 11.25 白山まるごと体験教室「イヌワシをみつけよう」
(プナオ山観察舎) |
| 11.7 JICA 研修 (中宮展示館) | 12.1 白山自然ガイドボランティア第 3 回研修会
(文教会館) |
| | 12.10 県政出前講座「白山の自然と暮らし」(朱鷺の苑) |

はくさん 第 40 巻 第 3 号(通巻 165 号)

発行日 2012 年 12 月 28 日 (年 4 回発行)
印刷所 前田印刷株式会社

編集・発行

石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ 4
TEL.076-255-5321 FAX.076-255-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp